

うのが『パトリックと本を読む』。アジア系のエリートがアメリカの種問題（白人VS黒人）とどのように向き合うかに興味があって手に取ったが、二人の若者の成長の記録として読むべきなのだろう。

一九七〇年に徒手空拳でシリアに渡り、二百万人の弟子を育てた空手家の破天荒な人生を描くのが『ロレンスになれなかつた男』。「多様性」を掲げつつ、異物を排除してますます均質化する現代の日本社会から

は、もはやこんな風雲児は現われな  
いだろう。

三十五歳でエベレストで滑落死した栗城史多の短い生涯を追う『デス・ゾーン』。登山家というより「起業家」「SNSのパフォーマー」だった若者が、メディアの注目を集め、支援者の期待を背負い、自らつくった虚像にどんどん追い詰められていく経緯が哀しい。

「喝采」くらいしか知らなかったのだが、どんな「理由」があったのか

ジャック・デリダ、ジル・ドゥルーズなどポストモダン思想のスーパースターが次々と登場し、皮肉と諧謔の餌食にされていくのが楽しい。

自爆テロが日常的に起きるバグダードで、散乱した身体をつなぎ合わせた遺体に魂が宿るといふ奇想が『バグダードのフランケンシュタイン』。テロの犠牲者たちの怨念によって生まれた怪物が、復讐を遂げていくうちに、徐々に加害者へと変貌していく。なにが善でなにが悪かわからない混沌のなかで、生き延びることの困難が描かれる。

ハーバードを卒業し、米南部の荒んだ高校で英文学教師のポランティアをした台湾系アメリカ人女性が、パトリックという優秀な黒人生徒と出会う。ところがロースクールに進学した彼女のもとに、パトリックが殺人を犯したとの連絡が……。彼女はふたたび南部に戻り、拘留所に通って二人だけの読書会を始めるという

「今月買った本」は橋玲、森絵都、手嶋龍一、本上まなみの四氏が交代で執筆いたします。

- 【エデュケーション 大学は私の人生を変えた】
- ① タラ・ウェストバー 村井理子訳 早川書房 2200円+税
  - ② クリストファー・ワイリー 牧野洋訳 新潮社 2100円+税
- 【言語の七番目の機能】
- ③ ローラン・ビネ 高橋啓訳 東京創元社 3000円+税
- 【バグダードのフランケンシュタイン】
- ④ アフマド・サアダーウィー 柳谷あゆみ訳 集英社 2400円+税
- 【パトリックと本を読む 絶望から立ち上がるための読書会】
- ⑤ ミシェル・クオ 神田由布子訳 白水社 2600円+税
  - ⑥ ロレンスになれなかつた男 空手でアラブを制した岡本秀樹の生涯 小倉孝保 KADOKAWA 2200円+税
  - ⑦ デス・ゾーン 栗城史多のエベレスト劇場 河野啓 集英社 1600円+税
  - ⑧ 「ちあきなおみ 沈黙の理由」 古賀慎一郎 新潮社 1350円+税
  - ⑨ 「ルポ 入管 絶望の外国人収容施設」 平野雄吾 ちくま新書 940円+税
  - ⑩ 「小説「安楽死特区」」 長尾和宏 ブックマン社 1400円+税

# 今月買った本

連載 220

## 橋玲 (作家) 事実と虚構の間



連邦議会議事堂を占拠した熱烈なトランプ支持者のなかには、「ディープステイト（闇の政府）」がアメリカ社会を支配しているという陰謀論を信じる「Qアノン」なるグループがいるという。『エデュケーション』は、連邦政府が秘密結社に支配されているばかりか、いままさに大災厄によって世界の終わりが訪れると信じるモルモン教の原理主義者（サブイバリスト）の家庭に生まれた女性の物語。行政を拒否する父親によって高校までいじめも学校に通えなかった著者は、自らの意志で大検を受けて大学に入学し、ケンブリッジ大

学、ハーバード大学で学び、哲学の修士号と歴史学の博士号を取得する。トランプを大統領の座に押し上げたのは、SNS（ソーシャルネットワーク）を使った巧妙な心理操作だったと告発するのが『マインドハッキング』。フェイスブックの「いいね!」をビッグデータで解析するだけで、わたしたちの性格はほぼ完璧に読み取れるのだという。ハッカーの若者の冒険譚としても出色。

一九八〇年に批評家ロラン・バルトが交通事故死した。これがじつは殺人事件だったとの奇想が『言語の七番目の機能』。ミシェル・フーコー、

気になって読んだのが『ちあきなおみ 沈黙の理由』。バブルの余韻が残る一九九一年、たまたま大スターの付き人になった二十代半ばの若者が、お伽噺のような「純愛」の迷宮に取り込まれていく。

この国の入国管理の実態を丹念に取材した『ルポ 入管』。場当たりのな政策変更が「非正規滞在」の外国人を混乱させている。家族とともに日本で暮らし、税金を納め、子どもが学校に通い、犯罪歴のない外国人には居住権を与えるべきだろう。

東京オリピックが巨額の損失を生み、社会保険制度が維持不可能になった二〇二四年、政府は東京・銀座のカジノ特区の隣に「安楽死特区」をつくる——という近未来を描くのが『小説「安楽死特区」』。安楽死第一号は末期がんを告知された女性の元東京都知事で、「私はこの「安楽死特区」を成功させて、皆さまに、死ぬ自由を差し上げたい」と述べる。



大正十二年一月三十日第三種郵便物認可  
令和三年三月一日発行(毎月一回)日発行  
第九十九卷第三号(二月十日発売)

# 文藝春秋

芥川賞発表 受賞作全文掲載&選評  
宇佐見りん「推し、燃ゆ」

総力特集 コロナ第三波「失敗の本質」/**追悼** 半藤一利 三月特別号

